

狭山にゆかりのある文化人紹介 その9

こやの こういち

日本画家・政治家 小谷野 浩一 氏

1905(明治38)年～1979(昭和54)年

人間郡柏原村に生まれる。本名は儀平。18歳頃から絵を描き始め、狩野光雅に師事し日本画家を志す。しかし、生家が大地主であり人望もあったことから周囲の人々に推されて政治の世界に入り、柏原村議会議員や柏原村長、狭山市議会議員を歴任し地方行政に携わる。また、狭山市教育委員、狭山市文化協会初代会長、狭山市史編纂委員、文化財調査委員なども務め、広く文化の普及に努めた。

『広報さやま』で1966(昭和41)年8月号から始まった「史跡文化財めぐり」の執筆を務めた。この連載は1974(同49)年2月号まで76回にわたった。日本美術院に所属し、奥村土牛や山口蓬春とも親交があった。鯉の絵を得意とし、作品「遊」で第32回院展に入選する。



作品「遊」

また日本画院展にも入選歴がある。

狭山市市民会館建設の際、大ホール緞帳の原画を手がけ、入間川、秩父連山、つつじなど狭山を象徴するものを取り入れ描いたが、西陣織の緞帳の完成を見ることなく亡くなる。史跡や文化財に関心を持つ市民が増え、文化財保護の重要性が徐々に理解されるようになったことは、氏の残した大きな功績である。



自画像

取材：張替 絹子

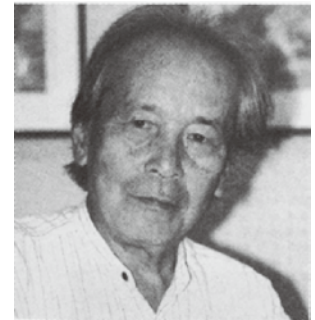
いとう わたる

画家 伊藤 亘 氏

1921(大正10)年～2012(平成24)年

1921(大正10)年、新潟市に生まれ、1974(昭和49)年より狭山市に在住。印刷版下画工、看板工を経て、新聞社、広告代理店、出版社、食品会社でグラフィックデザイン、イラストレーションの仕事に携わる。

2000(平成12)年、狭山市美術家協会会員として、文化団体連合会主催「第1回狭山市民芸術祭」にて舞台美術担当。以降、10周年記念公演まで数々の作品を提供し活躍する。狭山市市民会館小ホールホワイエ常設展示<喜怒哀楽面>は第5回芸術祭の舞台にて使用し寄贈されたもの。また、狭山市内小中学校及び図書館の企画にて、ダンボールで作るお面の工作等の指導にあたり、教育の分野においても多々貢献した。



1983(昭和58)年、氏が創始したペーパーレリーフの手法での「マザーグースメロディ」発表以後、「ティル・オイレンシュピーゲル」、「グリム童話の世界」、「宮沢賢治童話の習作」、「クリスマス童話展」などの個展を各地で開く。1996(平成8)年、「絵本グリム童話の森」シリーズ第1弾『ラプンツェル』(パロル舎)発刊を機に、「グリム童話の世界」60点がグリムの里いしばし「グリム館」に常設展示される。

日本童話名作選 宮沢賢治作品『虔十公園林』(偕成社)、シリーズ親と子で作る25『ペーパーレリーフ』・同26『ダンボールでつくるお面』(創和出版)などの出版物がある。

取材：板屋 捷子

※ペーパーレリーフとは、0.3～0.5ミリほどのボール紙を部分部分のチップに切り抜き、高低を付けて何層かに貼り合わせ、木工着色塗料を塗っては拭き払い、塗り重ねて磨きあげていく製法。